

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《平和メッセージ》

平和を求めて

司祭 ビカステス 今井 丞治

1945年8月15日、日本は連合軍に無条件降伏し、満州事変から始まる15年に及ぶ戦争の時代は終わりを告げました。それから日本国憲法が發布され、それ以来、平和憲法に守られて、日本は平和を享受してきました。この平和は「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。」(ヨハネ14・27)と主イエスが弟子たちに約束された平和なのでしょうか。

1945年8月15日、私は江田島で終戦の詔勅を聞いていました。其の日、私は分隊監事室に呼ばれ、父親が聖公会の牧師で非合同派であることが確かめられ、これからの日本の将来を宜しく頼むと分隊監事のH少佐から告げられたことを忘れることが出来ません。この日に私の18年の人生が終わり、新しい人生が始まりました。「己が友の

ために命を捨つる、これより大いなる愛はなし。」との聖言に答えて生きてきた人生の終わりでした。私の人生を前に踏み出させるためには「己が友」をどのように理解するかが課題でした。神は、悪人善人の区別なく日を照らし、雨を降らせる、神



は人間全てを愛しておられる。主イエスは全ての人の友です。人は全て人種、民族、国民、出自の区別なく主に結ばれた私の友です。敵も味方も無く皆私の友です。そうであるならば敵と戦うために命を賭けるのではなく、戦争に反対するために、平和のために、死を賭して身を投ずるべきであったという悔悟の念が時間の経過と共に深まって、新しい人生へと歩み出す事

ができました。

主イエスは復活された後、

弟子たちに平和があるようにと挨拶され、手と脇を見せられました。平和は主の十字架の苦しみと死によるものです。死と苦しみによって神は人と和解して下さる。神は赦して下さるといふ信仰に基づいて人は悔い改め、赦されて和解が実現し平和が与えられます。これは人間関係においても国家間においても同じことが言えます。赦すということほどんなに苦しいことか。赦されるべき者は、赦すことの苦しみを超克しての赦しを受けて平和が齎(もたら)されるのです。英国での経験ですが、夫を日本軍に依って惨殺された一英国未亡人が、教会の礼拝で日本人の私と主の祈りを共にしながら日本を憎み赦さないのは罪だ、その罪を赦して欲しいとの告白を聞いた時の平和の喜びを想起しています。「わたしたちの罪をお赦し下さい。わたしたちも人をゆるします。」と祈り続ける私た

ちは自身の罪の確認と、人を赦す覚悟が求められています。人間は絶対的存在ではありません。神によって創られた人間は相対的存在です。お互いに赦し赦される関係に立つ時、平和が与えられます。国と国との関係も同じです。力による抑止力の平和論は矛盾を孕んでいます。この政策には、敵国の存在が想定され、不信が前提となっています。力の均衡が破れ、復讐の連鎖が始まると、どのような悲惨な結果を齎すか私たちは経験しています。

1945年8月15日、敵対する国が存在しない国になった日本は、どの国とも信頼関係を築いて平和を保つことが出来る国になりました。自らの過ちを認め、他の国々と赦し赦される関係に立つて平和を実現し、日本国憲法第九条の理想を追求して世界平和の先駆けとなり、人類に貢献できる日本国でありたいと願っています。

(東京教区退職司祭)

特集 戦後70年の今

ヘイトスピーチ・歴史・在日はいま

聖公会生野センター総主事

呉 光現（オ・クアンヒョン）

2015年の今、「クソチョンコを八つ裂きにして家を焼き払うぞ」



「ゴキブリ

チョンコを日本から追い出せ」と白昼堂々大阪、東京を始め日本各地で醜いレイシスト（民族差別主義者）が徘徊している。まさか「殺せ」「抹殺せよ」とまるでナチ下のドイツのようなことが起こると思わなかった。しかし同じ事は1923年の関東大震災朝鮮人大虐殺の時にもあったのを認識しているであろうか？この原稿を書いている前日も大阪でヘイトスピーチがあった。日曜礼拝の後、現場に行った私は礼拝で「罪をゆるします」と告白しながら彼らが赦せなかった。ヘイト街宣に向き合いながら「心がささくれだつ自分がむなしくなる現実をどうしたらいいのだろうか？「信仰が足りない」

と言えどそれまでだし、でもそういうられると悲しくなる。

戦後、在日朝鮮人の最大の密集地域である大阪生野をはじめとして両親の世代の苦難はどう表現できるのか？「鯛も魚か、朝鮮人も人間か」とバカにされながらも、生きるため、家族を養うためひたすら耐えてきた親世代、そのおかげで今の私たちがある。21世紀の今もこの日本には私たち外国人の人権を保障する法律は一つもない。

戦後70年は解放70年。又今年は韓国国交樹立から50年でもある。私は幼稚園から大学まで「日本の学校」で学んだ。読者にとつては「日本の学校」というのは違和感があるかもしれない。これは在日では今でも言われることである。「日本の学校」という語感から皆さんは何を思うのだろうか？民族教育（学校）は解放後のとても大事なことであった。植民地の宗主国に居住していた200万人を越える朝鮮人は一路故国、故郷を目指したが、解放されたはずの故国は東西冷戦の最前線になり帰るに帰れない人たちが多く、帰れなかった人たちが今の在日韓国朝鮮人になっていった。植民地下禁じられていた民族の言葉・文化を子ども

たちに教える、それが民族教育のスタートであった。GHQ（占領軍）から日本経営の不安要素になると見なされ多くの学校は迫害され、潰されていった。それでも民族教育は民族学校で、大阪では公立の学校で続けてこられた。私にも公立小学校で受けた民族教育は人格形成に影響を与えた。

1世の血のじむような苦労のおかげで2世・3世は「生きていくことの意味」を求める事ができた。大阪生野区は小さな町工場がたくさんあり、銭湯が大阪で一番たくさんある地域であった。最底辺の仕事を担いながら日本社会で生きてきて「生きることの意味」の一つに権利獲得運動が浮かんできたのであった。

人として当然の権利はこの70年間、闘いによって得ることができた。どんな差別・制約があったか？国民健康保険、国民年金、住宅、教師、公務員、一般企業、外国人登録証の指紋押捺・常時携帯そして信じられない事に「小中学校入学に際する退学容認の誓約書」の提出まであったのだ。大人になって、小中学校に入学する際に「学校の規則を破ったら退学させられても異議申し立てしません」という一筆を両親

の世代は書かされていたのが分かった。いかなる思いだったのか？両親の悔しさを思うと胸が張り裂けそうだ。

多くの差別的な制度は改善され、生野地域も在日の町内会会長やPTA会長が誕生するくらい変化してきた。しかし日本社会は朝鮮に対する植民地責任を一貫して認めていない。その結果、私たちには日本の市民的権利はほとんど保障されていない。そして冒頭にあげたレイシストの跋扈（ばっこ）とヘイトスピーチの蔓延。

最後に私の娘の言葉を皆さんと一緒に分かち合いたい。

「アッパ（お父さん）、ヘイトスピーチの現場に行ってアッパ、オンマ（おあさん）、ハラボジ、ハルモニがどんな思いで、日本で住んできたかと思うとあいつら絶対許されんわ」。在日3世の若い世代が悲しみと怒りをこのような言葉ではき出すような日本社会を私たちは望んでいるのだろうか？

キリスト・イエスに繋がる私たちは和解の働きを、「怒りと悔い改め・赦し」の信仰で歩んでいきたい、それをこの社会に生きるすべての人と共に歩みたいと願っている。

戦後70年、沖縄からの視点

沖縄教区主教 上原榮正

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

(マタイ5:9)

沖縄は普天間基地移設に伴う辺野古への米軍の新基地建設に強く反対しています。しかし、政府は沖縄県の約80%が反対する中、「普天間基地の移設先は、辺野古以外にない。」として、肅々と、辺野古の海の埋め立てを進めています。新基地建設には、地政学的問題、米軍の抑止力、利便性など、幾つかの理由があります。しかし、本土でも米軍基地の受け入れ先がないので、「辺野古以外にない」というのが現実です。結局は、米軍基地が集中する沖縄への押しつけ以外何ものでもありません。この状況を、翁長沖縄県知事は政治の墮落だと言います。

1945年、敗戦後の日本の方向を決めたのが、日本国憲法です。憲法には、国民主権、基本的人権の尊重、戦争の放棄などが定められています。自民党は、憲法はGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の押しつけだからと、改憲しようとしています。日本国憲法は、世界に誇れる憲法です。

1952年4月28日、日本はサンフランシスコ条約で、沖縄を切り捨てることで独立しました。沖縄では、「屈辱の日」と呼びます。沖縄は、国連の信託統治までの間ということ、米軍支配下に置かれます。信託統治になれば、沖縄は国連の監視下に置かれ、数年で選挙が行われ、自治が行われていました。そうであれば、米軍の横暴な支配はなかったと思います。しかし、米軍は、信託統治を国連へ提言することなく、

1972年、沖縄が日本へ復帰するまで、米軍支配下に置きました。その間、沖縄には日本国憲法も国連憲章も適用されませんでした。沖縄人に人権も生命財産の保証もなく、まるで虫けらのような存在に於かれました。



琉同祖論」を掲げ、日本人になろうと、復帰運動が行われました。復帰運動を支えたものが、日本国憲法です。日本では憲法によって人間としての尊厳、生命、財産、自由などが守られている。沖縄人も、日本人になれば、憲法によって、守ってもらえると思ったからです。

復帰を前に、1971年11月、米軍基地撤去など沖縄の要望を記した「復帰措置に関する建議書」を携えて、屋良朝苗主席が上京しました。屋良主席が乗った飛行機が羽田に着陸した時、国会で沖縄の「返還協定」を強行採決し、米軍基地の存続を決議しました。「建議書」は幻になりました。復帰時には自衛隊も沖縄に配備されました。米軍と米軍基地を支えたのが、

日本国憲法よりも上位にあるとする日米安保条約と日米地位協定です。復帰後も、沖縄に米軍基地が置かれたため、日本国憲法は適用されませんでした。沖縄の声は無視され、人権や尊厳は踏みじられ、裏切られたというのが、復帰時の実感です。

戦後、沖縄が求めたものは、平和であり、生命財産の保証であり、人間としての尊厳の回復でした。昨年は集団的自衛権が、今年安全保障関連法案(安保法制)が閣議決議され、今国会で採決されようとしています。日本は、戦争を放棄した平和国家から、戦争をする国になろうとしています。これは憲法違反です。日米安保によって、本土は沖縄に米軍基地を置くことで、その実りを受けてきました。安保法制が国会で決議されたなら、沖縄への更なる米軍基地、自衛隊基地の負担が増すことは明らかです。それに、今後は米國が戦争をすれば、いつでも米軍基地のある沖縄もターゲットです。実際、世界のあるところから戦争があります。日本も安保法制によって戦争に加担し、日本全体が戦争に巻き込まれようとしている、それが戦後70年の沖縄から見える日本です。

あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。(ヨハネ16:33)

沖縄では普天間基地の野嵩ゲート前で、辺野古で、高江で、新基地建設反対が行われています。皆さまのご支援をお願いします。

特集 戦後70年の今 青年たちと語ろう

今回は太田信三聖職候補生（以下「O」）を進行役に下条あすかさん（S）、新田紗世さん（N）、藤堂順平さん（T）、宮崎真理さん（M）、山崎健吾さん（Y）の5名の青年をお集まりいただき「戦後70年」をテーマに座談会をおこなった。

O この夏、敗戦から70年を迎えます。

今年のイースターに向けて主教会メッセージ「戦後70年に当たって」が発表されました。最初にこれを読み、その後、私たちの目線からみた「今」を分かち合いたいと思っています。

声を出せない人の「声」

O みなさん、主教会メッセージを読んで、どんな感想を持ちましたか。



T メッセージに記載されている項目の一つ一つが重要なことで、考えを共有するには時間が足りないと思います。Y 大切な事柄ということは理解できるが、内容が実生活から遠い印象を受けました。だから、メッセージが言わんとしていることが心に響いてきませんでした。

その中で「東日本大震災と2012年宣教協議会」で提言された「声を出せない人びとの『声』となっていく」というメッセージは、相当な覚悟が必要で、安易にはできないという、恐さを感じました。N 代わりに「声」となるために、「声を出せない人びと」の気持ちを謙虚に聴き、絶えず「声」を自分で都合良く変えない努力をしなくてはならないと感じました。

戦争責任を考える

T 戦後70年が強調されているのは、戦時中に回帰しそうな雰囲気を感じているからだと思います。日本の教会の多くが国家の圧力に屈してしまっただけという過去があった為、戦時中のような状況にな

ったとき、教会としてどのような態度を取るのかが問われているように感じました。



N 教会に加えて、自分自身がどのような行動をするのか問われている気がします。「平和や安定がおびやかされる状況が生まれつつ」ある今、実際に脅かされる前に、私は何ができるのかを考えたいと思います。M 私たち自身は、日本の戦争責任についてどのように感じているのだろうかと思いました。

O みなさんの発言から、これらの問題に対して、私たち自身のことをもっと深く考え、その上で行動することが求められていそうですね。

T 何をするかという問いに関連して、少し前に朝日新聞の元記者に対して事実誤認による過剰なバッシングや脅しがあり、ミッション系の大

学が反対の姿勢を明確にしたという事実がありました。戦時中に戦争に協力してしまっただけという教会の責任を意識してのことだと思いました。

S 日本聖公会の戦争責任については、具体的にどういうことなのかを知りたいです。

O 聖公会を含め多くのキリスト教会が戦争に協力したことで、結果として平和や人権が踏みこじられたことに対して、日本聖公会は責任があることを認め、今後教会が同様の道を歩むことが無いようにと考えているのだと思います。しかし、教団としての考えが信徒一人一人にまで共有できていないようですね。

草の根運動

N 教会がさまざまな問題に取り組んできたことを、聖堂内のポスターなどで知る機会があつたのですが、自分のこととして、積極的に読んだり、参加するには至りませ

ませんでした。Y 組織としての活動ができないのは、信徒数が少ないというクリスチャンを取り巻く日本の状況も原因の一つではないでしょうか。さまざまな取組について、素晴らしい活動の多くが草の根運動で、活動している人の間でしか情報や問題意識が共有されていないように思います。

T 草の根運動というと小さくて弱いイメージがありますが、権力と距離をおいて活動できるということでもあると思います。国や組織が中に入ると、駆け引きが生まれやすいですが、問題を共有している人たちの間だと、問題の本質を真摯に話し合える環境が作れると思います。

Y 草の根運動が大事という視点からすると、信徒の身近な事柄に関連させ、一人一人の問題意識を誘発するような声明や表明があると、信徒全員が自分のこととして、情報を共有できるのではないのでしょうか。

N 教派・教団として意思表示をするときには、クリスチャンでない人への伝わり方

にも気を配る必要があると思います。広島、長崎の原爆の歴史を強調されて学んできた人たちに對して、いきなり「日本は戦争責任があるから近隣諸国に謝り続けなければならぬ」と声高に叫んでも、引かれてしまうのではないのでしょうか。

○ 教会の内と外、自分と他の人とで、戦争という歴史の捉え方が違うということを知ることが大事なことですね。

「神の国」という視点

Ｔ 原爆投下という事実を、米国では戦争終結のために必要であったという意見が多いと聞きます。日本の立場から米国に「無差別に多くの民間人が犠牲になった原爆の投下」は間違いであったと伝えて良いと思います。

Ｍ お互いの正義を主張しあうべき時に、日本人は身を以て体験した「無差別殺人は悪である」という正義を主張できていないと思います。

Ｙ 教会として考えるには、自国や他国という視点ではなく、国籍に縛られない視点を持つ必要があると思います。

「神の国」の視点といえるかもしれませんが。その視点に立ちとうとすることで、国の立場に縛られず、キリストを中心として、互いにキリスト者として交わることができているのではないのでしょうか。

Ｓ 2012年の「日韓青年セミナー」の際、日本を訪問した韓国の青年たちは、事前に竹島（韓国名・独島）の話題をしないように注意されていたようですが、実際の会合では、この問題についても友好的に話し合うことができました。キリスト者という共通の視点があれば話し合うことができるのだと思います。

Ｎ 普天間の基地を外から見学していた時、フェンス越しに突然「出て行け」と言われました。（案内の方が基地移設反対運動をしているのが理由なのでしょう。）同じ沖繩の人同士が敵対している現実があることを悲しく思いました。

辺野古にある「ジュゴンの見える丘」から建設予定地近くの綺麗な海を眺めながら中高生が言った「（基地ができ

たら）ここにも来られなくなるね」というつぶやきが、心に突き刺さり、現場に行かなければ理解できないことがあると思います。

Ｔ 基地を沖繩に肩代わりしてもらうことによつて、僕たちは70年間戦争をせず暮らしてきたことを意識するべきだと思います。勿論、米軍基地を肯定しているわけではありません。

祈ること

○ 戦争、日韓関係、基地問題とさまざまな問題を考えるとき、自分ほどの立場に立つてその問題に向き合っているのかを意識する必要があります。そのため、問題点や歴史の経緯を知ろうとする必要があります。

Ｔ キリスト者として、その立場が信仰に立ったものでありたいです。

Ｙ 僕は成人になって洗礼を受けたこともあり、自分自身の立場が信仰に基づいたものでありたいと思っています。

Ｔ 福音理解を都合良く変えないことも必要ですね。
 Ｎ 最近社会問題に対する

温度差が教会の外と縮まってきたように感じます。ヘイトスピーチや沖繩の基地問題などがマスコミでも取り上げられる機会が増え、このままで良いのかという意識を持つ人が増えたからだと思います。

Ｍ 自分たちが平和への活動ができるようにお祈り出来たらと思います。力づくではうまくいかないと聞いたことがあります。時間はかかりますが、祈りを通して、草の根運動を続けることが効果的なのではないのでしょうか。
 Ｎ 祈りによらなければ、謙虚に活動し続けることはできないと思います。

Ｙ 僕が尊敬している一つにクエーカー教徒の「小さなアクシオン」があります。祈りに裏打ちされて、自分のできるところを行動する態度を見習いたいと思っています。

○ 東京教区では、青年会活動を活性化させています。先日も今回話題にした主教会メッセージを読んで、分かち合いの時間をもちました。6月の定例会では香山司祭を招いて「なぜ、教会

が社会問題と関わるのか」というテーマでお話しをしていただきます。

また、意見が言い合える、語り合える他者との関係は「平和」ということでも非常に大切なものだと思います。教区中高生キャンプでは、中高生世代の参加者・青年スタッフが準備やキャンプを通して語り合える関係が作られます。スタッフの青年たちが、とても大切な働きを担ってくれています。

この座談会の記事が各教会での「戦後70年」の語り合いのきっかけになることを期待して終わりたいと思います。ありがとうございます。

（文責・広報委員会）



教区聖餐式

「エリアで祝おう！ユーカーリスト」

東京教区では、これまで秋に行ってきた教区フェスティバルに替えて、9月23日（水・秋分の日）午前10時30分より、教区聖餐式「エリアで祝おう！ユーカーリスト」を行います。

この教区聖餐式は、私たちが、居住地から時間的・距離的・地域的に近い会場教会に集い、私たちがそれぞれ所属し、通っている教会の枠を越えて、新たな体験をし、地域と教会という視点をより深めてみよう、という趣旨で行われます。

東京教区内の地域に、信徒の皆様が居住地や移動の路線、会場となる教会の収容人数などを考え、8つの会場教会（阿佐ヶ谷聖ペテロ教会・池袋聖公会・小笠原聖ジョージ教会・神田キリスト教会・清瀬聖母教会・聖パウロ教会・東京聖三一

教会・八王子復活教会）を決めました。

現在、東京教区では東京教区再編成準備室の活動のもと、組織的、宣教体制的な再編成を検討しています。その中で、より現状に即し、また将来の宣教ビジョンにとってよりふさわ



会場の一つである神田キリスト教会

しい地域的・エリア的な教会間の協働のあり方も検討しています。その意味で、9月23日に行われる教区聖餐式は、新たな体験のうちに、地域と教会という視点をより深め、教会同士が地域的・エリア的に協働していく宣教の豊かさを思い描く、有意義な機会となるこ

とを期待いたします。

9月23日の教区聖餐式という同じ日に、会場教会8ヶ所で、同じ式文を用いて祈り、大畑喜道東京教区主教メッセージを聴き、同じ趣旨のもとで聖餐式をもつて一致を証ししたいと願います。また礼拝後には、お弁当を持参しての親睦の昼食会も行えるよう、現在実行委員会のもと準備が進められています。会場となる教会には、極力ご負担がかからぬよう、参加者みなで協力し合っていきたいと思えます。午後3時には日程を終了する予定です。

6月より、各教会・礼拝堂宛に、教区聖餐式当日の礼拝奉仕者を募集する申込み用紙を送付しております。当日の聖餐式でのサーバー、アッシャー、奉献、聖書朗読、代祷、奏楽の奉仕者を募集しています。申込み締切りは8月20日ですが、当日ご参集できる会場教会での礼拝のご奉仕にどうか協力を宜しくお願い致します。

（実行委員長 司祭 高橋 眞）

「司祭の2の1冊」

『パウロ』コンバクト評伝シリーズ6

E・P・サンダース著

教文館・一九九四年

司祭 菅原裕治

本書は、パウロの評伝です。著者の研究分野は、初期ユダヤ教研究、パウロ研究、イエス研究と広く、本書の背景には初期ユダヤ研究があります。著者は、初期ユダヤ教を従来プロテスタント教会が理解してきた「行為義認主義」ではなく「契約規範主義」と捉えます。それは天地



の創造者である神の恵みが最初であり、その神がイスラエルを選び律法を与え、神の選びの恵みへの応答の方法として律法に対する従順があると考えます。当然、著者は、パウロをいわゆる「律法主義」的ユダヤ教に対する反対論者とは見ません。パウロの思想を「参与論的終末論」とします。それは、キリストによる全ての人への神の救いを確信し、罪に対して死んでキリストの復活の約束により、終末時が完成することを希望とし、その

希望の中で終末の時まで、神の恵みの業に参与する自分の行動を規定することです。それゆえ、著者は、「信仰義認」をパウロの中心の神学とはしません。そしてパウロのユダヤ教からキリスト教への移行を、初期ユダヤ教の「契約規範主義」（救いの古いシステム）から「参与論的終末論」（救いの新しいシステム）への移行と表現します。パウロは、新しいシステムに属しながら、常に新旧の間でジレンマを感じつつも、キリスト

にある確信によって情熱を持って語りつづける宗教的思想家なのです。本書のパウロ理解は、パウロの手紙の読み方をより豊かにします。直面した多面的な問題に対して、自分の多様な解答を相互に調和させず、キリストによる新しい救いのシステムに希望を主体的に関与するパウロの姿が浮かび上がるからです。本書は、現代の世界と教会に必要なのは、このパウロの苦勞なのだとし、宣教・牧会そして学術的神学的営みに大きな影響を与える、パウロの入門書です。

ようこそ牛込聖公会聖バルナバ教会へ



明治の開国以後では当教会の設立は早い方で、そんな事に誇らしさを持っている。古くは牛込区水道町・築地町なのだが昔の事、現矢来町には築地町から1952年に来た。その頃は地下鉄東西線は話すら無くバスと神楽坂に都電のみ、地下鉄神楽坂駅の出来ることにより東京教区でも随一の駅前至便の場所を得る事となった。神楽坂は明治以来名は通ってはいしたが近頃のテレビの報道・バラエティー等でいよいよ名が上がり、人口に膾炙すること盛んなものがある。

1991年今の聖堂を得、交通の利便性のお陰で、教区の皆様又それ以外の方にも、会議・集まりにご利用いただいている、まさに駅前の街のランドマーク。ただご多間に洩れず都心地域に根ざす教会として、人口のドーナツ化により基盤の弱くなったことは否定できず、盛り返すのに懸命である。我が牛込聖公会聖バル

ナバ教会、教会運営にぎこちなさを感じているところがあり、その改善も急務である。信者が心地よく礼拝を捧げることが望みだが、もつれをほどこには多くの時間を費やさねばならぬか。そんな中、日本に多くいる韓国人の在日者・就労・留学、また最近特に多くなった旅行者の為の、韓国



語による聖公会の正当な礼拝をささげる教会が無いと知り、活動に取り入れ4月から開始した。これは、当教会に赴任された韓国人牧師池星熙(ジ・ソンヒ)司祭の発案によるもので、新聞の記事にも(外国で母国語に触れることがどれほど

心なごむものかと、ましてそれが外国で母国語の同じ宗派の礼拝となったら)と云う事が話題となり、やってみようではないかと踏み切った。当教会にも信徒で外国を仕事の場にする人がいるが、帰ってきて礼拝に出るたびにジーンとしますと云っている。多々意見もあつたが実行、今後を見守りたい、見守って頂きたい。毎日曜午後2時に韓国語聖餐式をする。

前述の韓国語礼拝、4月12日ソウル教区主教・前任主教・東京教区主教の臨席を得、ソウル教区大聖堂他の聖職と信徒、日本聖公会の賛同して下さる多くの信徒等を迎え、厳かな内にも盛大に華やかに執行された。前途の広がりを感じさせた。

交通至便の教会、教区内外を問わず日曜の午後のひとときおいで下さい、お帰りには神楽坂のお散歩でも。皆様ご来訪をお待ち致しております。(鶴飼良哉)

《信徒リレーエッセイ》

悠久の歴史に想いを馳せて

聖アンデレ教会

林 圭佑

日本聖公会東京教区の主教座聖堂でもある聖アンデレ教会は1879年6月4日、今から136年前の明治12年にレンガ造りの初代聖堂(礼拝堂)により、その歴史がスタートしました。その後、震災や戦火などによって幾度となく祈りの場である礼拝堂を失うものの、先人たちの想像を絶する努力の積み重ねにより、現在の礼拝堂へと、その歴史は脈々と受け継がれております。

聖アンデレ教会では毎年6月の第1主日を創立記念日として、とても多くの信徒が集い、祈りを捧げ、過去から未来へと連なる時の流れを共に感じ、イエス様との交わりを確かめ合うことよって、感謝と歓びの気持ちに満たされます。礼拝後は、恒例の記念撮影。今年は総勢151名で、4代目となる現在の礼拝堂と一緒に歴史を刻みました。主に感謝！

召命黙想会開催

聖職養成委員会

5月16日(土)、ナザレ修道院にて、召命黙想会を開催しました。これまでは「信徒黙想会」の名称で開催してき



女性としての働きに目覚め、そして聖職への道に導かれたというお話を聞きました。田光信幸司祭(阿佐ヶ谷聖ペテロ教会)は、「生涯一語」として、トマス・ア・ケンピスの書名でもある「キリストに倣いて」を取り上げ、キリストの生きざまに倣い、キリストの姿を追うことが召し出された者の歩む道であると話をされました。

今回の参加者は16名でしたが、希望者には講師の司祭との面談の機会を設けました。これまでの黙想会では参加者相互の分かち合いを十分に行うことが出来な

された聖職のお話を聞くことが多かったのですが、今回は教区の現職の牧師に講師をお願いし、「なぜ、この道を選んだのか?」というテーマでお話をいただきました。神崎和子司祭(三光教会)からは、司祭である夫とともに歩むうちに、様々な教派や団体の人との交わりを通して、

かかったのですが、今回は、参加者が講師・スタッフを交えて、話し合い、聞き合う時間を持ちました。また、開催の趣旨にあわせて、聖職候補生志願から認可までのプロセスについて、説明の時間を設けたことも、これまでになかったことです。(司祭 鈴木裕二)

教役者研修会を終えて

去る6月8日から10日まで富士箱根ランドにて東京教区教役者宿泊研修会が行われた(主教堂堂活動委員会主催)。主題は「聖職の働きについて」。

研修会は池袋聖公会で囁託司祭として勤務されている橋本司祭の基調講演から始まった。テーマは「教会・教区の形成を担う聖職として大切にしてきたこと」。橋本司祭のお話を通して参加者それぞれが置かれている現場でどのように聖職としての働きを具体化していくかについて考える時間となった。引き続き挽地茂男牧師(日本基督教団千歳丘教会)からの聖書の分かち合いでは、神さまによつて蒔かれていた私たちが一人一人がどのように実るかについて黙想する恵みをいただいた。

2日目は「ハラスメントについての学び」「教区再編成についての活動報告」「堅信前の陪餐」についての話と報告を聞

ちょっと聖書、ときどきユーモア (二十)

1. 光あれ
 牧師「神さまは、天地創造のはじめに“光あれ”といて光を創造されました」
 子どもA「どうして光をはじめにつくったの?」
 子どもB「そんなの簡単だよ。明るくないと何も見えないからだよ」

2. 定年
 信徒A「牧師の数も足りないんだから、70才で定年というのを辞めればいいのにね」
 信徒B「でもイメージがよくないじゃない」
 信徒A「どうして?」
 信徒B「日本古来のいい方で70才は“古希(こき)”っていうでしょ」
 信徒A「そうだけど、それが・・・」
 信徒B「だから古希の人を使うと“こき使う”ってことになるからね」

3. 妖怪ウォッチ
 信徒1「“妖怪ウォッチ”っていうアニメが子どもたちに流行ってるよね、それによると寝坊とか、世の中の都合の悪いことは妖怪の作業らしいよ」
 信徒2「そうか、それなら教会にもよく出てくる妖怪がいるよ」
 信徒1「どんな妖怪?」
 信徒2「“妖怪ウォッチ”じゃなくて“教会不一致”という妖怪がね」

き、学びの時間を通して牧会の現場における聖職としての心構え、教区再編成準備室の活動、聖奠に対する理解を深めた。そして3日目は神崎和子司祭、須賀義和司祭、卓志雄司祭から「司牧・教会の現場の分かち合い」が行われ、東京教区のそれぞれの教会が置かれた現状についても話を聞き、東京教区に必要とされる福音理解を分かち合った。年1回の学びと交わりを深める恵み豊かな時間に、(練馬聖方プリエル教会・東京聖マルチン教会 司祭卓志雄)